

Métier of the clinical philosophy

臨床哲学のメチエ
臨床の知のネットワークのために
Vol.3 1999年夏の号

特集：ケアの現場に触れる

- | | | |
|------------------------------|-------------|----|
| 老人保健施設ニューライフガラシアでのボランティア実習から | 堀江剛 | 3 |
| 断片的な気づきと問い | 栗田隆子 | 6 |
| 「うまくいかなかった」事例から | 高橋綾 | 8 |
| 聴くことの「入り口」 | 堀江剛 | 12 |
| 待機するゆとり | 会澤久仁子 | 14 |
| 老人保健施設の入所者とお話をとおして | | |
| 感じたこと・疑問におもったこと | 西村高宏 | 16 |
| 現場と実習 | 仁平雅子 | 21 |
| *** | | |
| 生きているはだか | 大北全俊栗田隆子高橋綾 | 24 |
| crème の誕生 | 栗山愛以 | 26 |
| 臨床哲学的余白 | | 27 |

特集

医療研究グループ活動報告

ケアの現場に触れる

——老人保健施設ニューライフガラシアでのボランティア実習から——



昨年度、臨床哲学研究室では、毎週の授業の中でケアをめぐる多くの議論を行ってきた。看護や介護の現場で働く人たちとともに、「ケアとは何だろう」という問題を具体的なかたちで考えていく作業が、そこでねばり強く重ねられた。しかしまた、特別に現場を経験していない者にとって、この問題を考えることの難しさも分かってきた。こんな状況もあって、医療研究グループでは、ケアの現場を実際に見てみる必要があると感じられていた。

幸い、臨床哲学の授業に参加されている看護師の西川さんの協力で、私たち医療研究グループは、彼の勤める老人保健施設ニューライフガラシアにボランティアとして参加する機会にめぐまれた。老人保健施設とは、病院で治療を終えたお年寄りや、何らかの理由で家族の介護ができないお年寄りを、在宅復帰を目的として一時的に引き取るケア施設である。西川さんによれ

ば、ニューライフガラシアは、地域やボランティアとの連携を通じた開かれたケアの在り方を模索しているという。私たちはこの理念に乗じるかたちで、単に見学することからさらに一步踏み込んで、ケアの現場にじかに触れることができたのである。

単なる見学ではないので、差し当たって私たちはこれを「ボランティア実習」と名づけた。昨年10月と今年3月、それぞれ数名ずつがこのボランティアに参加した。しかし「実習」とはとっても、例えば看護実習のように、ケアすることを将来の目的として、現場にトレーニングしに行くのではない。むしろ、「ケアとは何だろう」「ケアの現場とはどのような所なのだろう」あるいは「私たちにケアができるのだろうか」といった漠然とした問いや不安を携えながら、とにかくその場をこの身で体験してみよう、というのが実習の主な目的であった。

ケアの現場に触れて、そこに多様な現実が含まれているのがよく分かった。ニューライフガラシアには70人近くのお年寄りが二つのフロアに分かれて入所しており、一つのフロアに数名のスタッフ（看護婦（士）と介護福祉士）が配置されているだけである。人手は極めて不足している。これは、これからの高齢化社会の現実を映し出しているとも考えられるだろう。地域社会やボランティアとの連携は、専門集団に限られない開かれたケアという理念であると同時に、今後ますます深刻になるであろう人手不足に対処するための現実的な手段なのである。

そこでボランティアも、ケアに関して一定の役割を担うことになる。つまり、配膳や食事介護の手伝い、あるいは様々な催し物（ゲームやカラオケ）に参加すること以上に、入所者の話をゆっくり聴くことがボランティアのするケアとして重要になってくる。スタッフは忙しい。お年寄りとゆっくり顔を合わせて語り合うことが何よりも大切であり、大きなケアになることは分かっているのだが、人手の足りない中で入所者全員のケアや緊急の介護を優先せざるをえない。仕事として現場に関わっていないボランティアが、これを補う役目にある。

また、地域に住むお年寄りや子供（主に幼稚園児）との交流は、入所者に対する社会的な刺激を創り出す。老人保健施設が外部と交流せず、その建物の中で閉じられてしまうと、どうしても収容所のようになっ

てしまう。そこでケアされる者の活力も失われる。ケアは単に施設という閉じられた空間の中だけで語られるわけにはいかない、という現実がここにある。それはまた、施設を超えて、コミュニティーの問題に関係してくる。

さらに老人保健施設には、入所者の家族との連携という重要な仕事がある。お年寄りは、家族の中にある様々な理由から施設に入所し、また退所していく。施設の相談員は、それぞれの家族の事情とともに、施設経営のことを考慮しながらお年寄りの入所・退所を決定する。入所が長くなると、家族のほうで受け入れる余地がなくなり、結局お年寄り本人のケアにならない場合もありうる。ここにもまた、ケアが施設の中だけで済むというわけではない、という現実が見出される。相談員が家族とよく話し合っ、施設と在宅でのケアをコーディネートするのである。

このように、ケアの現場には多様な社会的現実が含まれている。そしてその中核をなすのは、言うまでもなく看護婦（士）や介護福祉士の日々の仕事である。それは、まさしく身をもってお年寄りを看護・介護するケアの現場である。入所者の細かな健康管理、寝起きや食事、入浴の介助、おむつの取り替えなどなど、一つ一つが大変な作業である。私たちはこうしたケアの現場に、もちろん十分にではないにしても、一つの臨場感をもって接することができたと思っている。

ところでボランティアとして施設を訪れ

た限り、私たちにも入所者と個別に接する機会が多くあった。そこではすでに述べたように、お年寄りの話をゆっくり聴くということが大きな意味を持っている。これは、ケアの在り方を考える上で、非常に興味深いことであるように思える。通常、ケアはケアする者のされる者への積極的な援助であると考えられている。ところが、話にただひたすら耳を傾けるといった受動的な行為が、それだけでケアになることもある。もちろんならないこともある。このような場面で生じているケアとは何だろうか。

一回目の実習を終えてから、私たちは「傾聴ボランティア」というものがあることを知った。これは、東海大学健康科学部社会福祉学科の村田久行助教授が提唱・実践されている活動である。一般に「傾聴」は、カウンセリングなどの初期面接における技法の一つに位置づけられている。しかし村田さんの試みは、「傾聴」がそれ自体で一つの独立した援助になるという考えから、社会福祉におけるケア（特にスピリチュアル・ケア）の在り方を深めようとするものであった。私たちは村田さんの本や論文を読むとともに、本人を臨床哲学の授業に招いて「傾聴」に関してお話をしてもらった。

こうした経緯から、私たちは二回目の実習で、特に「傾聴」をテーマとして設定することにした。そして、実習の場で「傾聴」ができたと思った時にはそれを記録するようにして、後で検討できるような材料にし

ようと試みた。しかしこれは、私たちが「傾聴」というケアの技法を習得したり高めたりする目的で行ったのではない。そうであれば村田さんの開いている「傾聴ボランティア養成講座」にまず参加したであろう（実際、これに参加することも医療研究グループで提案されたが、時間的な余裕がなく断念した）。

むしろ私たちの関心は、そうした技法を身につけることよりも、そもそも「傾聴」がそれだけでケアになる（あるいはならない）のはどういうことなのか、それを具体的な事例とともに考えることであった。実習の場でやみくもに「傾聴」を行うのではなく、むしろお年寄りとの世間話の中から偶然生まれてくる（あるいは生まれてこない）ケアの在り方に触れることができればよい。そうした偶然性や危うさを含んだ「ケアの現場」に、私たちは焦点を当ててみたかった。そのことを通じて「ケアとは何だろうか」ということを考えてみたかった。そして今も考え続けているのである。

以下の文章は、この実習に参加した者による感想や会話記録である。現場にほとんど初めて触れ、戸惑いを含みながらそこで考えられた「ケア」の問題を、読者が感じ取って下されば幸いである。最後に、林事務長を初めとする老人保健施設ニューライフガラシアのスタッフの方々に深く御礼を申し上げておきたい。彼らの積極的な協力があってこそ、私たちは「ケアの現場」に触れるという貴重な経験ができたのだから。（ほりえつよし 博士後期課程）

断片的な気づきと問い

栗田隆子

10/10(土)、10/31(土)(10/10は個人的に、10/31は大学の有志のメンバー7人との見学)の二回ガラシアを見学させていただいた。感じたこと、考えてゆきたいことを、思ったままに挙げてゆきたい。それは、あくまで「思ったこと」で、何かしらの根拠を求められると困ってしまうのだが、あくまで印象として受け取ったことを、書いてゆきたい。そこで、なにか読んで下さった人が感じた様々なことをフィードバックしてもらおうことを必要としている報告であると思う。

「ボランティア」とは？

私たちはこのガラシアに「ボランティア」の立場としてあの場所にいた。反省会のあるときに、この「老人保健施設」では、この施設内の建物の中だけで、そこにいるスタッフだけで完結するのではなく、地域に根ざした、開いたあり方を目指していくということが話されたが、それならば改めて、そのような外部から来た者、--通常「ボランティア」と呼ばれる--はどのように位置づけられるのだろう、とふと疑問に思った。

実際に確かに人手不足で、配膳などの場

面で「手伝う」ことは出来たと思う。看護婦(士)の人と、介護福祉士、そしてボランティアの役割は重複し、ある場面では分離する。それがいついかなる場で重複し、または分離するのか、ということに答えることは不可能なのかもしれない。むしろ、私が考えているのは、看護婦(士)という立場に立った人だけに全人格的な関わりが求められていく方向で、ケアが考えられるのは問題だという事である。

極論を言えば看護婦(士)というプロフェッショナルに「ケア」を求めるその「ケア」とはどのような性質のものなのかを明確にしたほうが良いのではないかとも思う。

そこから逆にボランティアという素人の、いわば「普通の人」に求められるケアが浮かび上がってこないだろうか。それは単純なプロと素人とといった二極の線引きをしようとしているのではない。看護婦(士)とボランティアという素人の「上下関係」としての線をひくのではなく(経験や技術の差の上下は当然あるが)、具体的な出来ることと出来ないことを、その場に即して考えてゆく際のおのおのの立場の違いで生まれてくる「線」を考察したい。

「痴ほう」とは？

実際に「痴ほう」と呼ばれる方々と話をして感じたことは、「痴ほう」といっても人の性格がそれぞれ十人十色に違うように、個性がそれぞれあること。つまり「一くくりには括れない」こと、である。けれども「痴ほう」である、ということを知りて接さなければ、その人を理解することも出来ない。そのバランスの難しさである。いきなり「きつい」ことを言われて落ち込んだこともある。また話が何度もリフレインして、疲れを感じたこともある。

そして「家に帰りたがって」いる人が多いのは確かだ。「こんなところに連れてこられて、嫌だったら、ちゃんと言ってね」と言われたり、「こんなところに連れてこられて・・・警察も来ないのよ」と訴えてこられた人もいた。

また、「私馬鹿だから、どうしたらいいのか分からないのよ・・・馬鹿だからここがどこだか分からないし・・・」といわれ、それに私はただオウムのように「馬鹿なんですか？」と答えることしかできなかった。痴ほうと呼ばれている人が、またさらに自分のことを「馬鹿」と言っているということが（少なくともそういう人もいる）とても私の心に引っかかっている。

その後西川さんが、あの人はこちらに来たばかりで混乱しているのだろう、と教えてくれた。接するに際し、その人の背景を知ってほしい、とそのとき強く思った。

施設の利用者の人の姿を受け止めるために「痴ほう」だから、という言葉で理解で

きることに、そうでないところを考えていきたい。たとえば笑いを醸すような利用者の発言に対して、ここは笑っていいところなのか、そうではないのかを後になるまで考えてしまった。五分後のことは忘れてしまうかもしれない人ではあっても、その五分を大事に出来るような、接し方。それはもちろん看護婦(士)の立場のひとつと考えなければならないこととしても、むしろ、「ボランティア」(ここではプロではない「普通の人」という意味で)の立場が考えていける事ではないか。

「聴くこと」とは？

わたしは五階の「痴ほう」の方が多く住んでいるところに長くいた。そこで「聴くこと」とは何か、ということを中心にラディカルな人たちで突きつけられたような気がした。いわゆる「通常」の言葉によるコミュニケーションは難しいのは事実だと思う。言葉を「聴くこと」ではない「聴くこと」とは何かを考えたい。それは先ほども書いた「その人の背景を知りたい」という気持ちの延長上にあると思う。

正直言って一回、二回通っただけではその施設のあり方も、もちろん一人一人のありかたが分かるわけでもない。

継続して通うことの大事さを感じると同時、その人とのそのときの一回の出会いの大事さを記述できるような言葉を見いだしていきたい。

(くりたりゅうこ 博士前期課程)

「うまくいかなかった」事例から

高橋 綾

[事例]

男性Iさん

(お昼の休憩を終わって、4階のお手洗いに行ったときにたまたま廊下で出会い、デイケア室まで車椅子を押していったが何もやっていないので、今度は2階の病院のロビーに行くとおっしゃったので、一緒について行った。二階のロビーでしばらく外を見ながらお話をした。長くいる方らしく、入り口を通るときに声をかけて行かれる知り合いの方ともお話ししておられる。家族と一緒にお見舞いに来た子供たちを楽しそうに眺めておられた。)

I：外は雨が降っていて出られないねー。

T：きょうは雨が降っていて、外に出られなくて残念ですねー。いつもはお天気がよかったら外に散歩に行ったりされるんですかー。

I：近くだけけど散歩に出たりするんだがねー。今日は雨で外には出られないねー。

T：そうですねー。もう少ししたら外はあったかくなるし、桜も咲くしきれいでしょう。

I：(外の木を指さして)あれが桜の木で、春になったら花が咲く・・・

T：早く外にでて散歩できるような季節になったらいいですね

I：昔なら遠くまで散歩に行けたけど、脚を悪くして・・・

なにか過去のことにさかのぼるような話にしたらいいのか、と思ったけれど、それ以上聞けなかった。

そのような話をしている間にも、受け付けに来る小さい子供たちに、しきりに目を細めて楽しそうにしておられるので・・・

T：ちいさいこはかわいいですねー。おじいちゃんは小さいお子さんがお好きなんですかー。

I：ちいさいのはかわいいねー。ここ（ロビー）も雨じゃあなかったら、ちいさいのがいっぱいいて、寄ってきたりして楽しいのに・・・

T：きょうは雨で人が少なくて寂しいですね。

I：人が少ないとねー。

T：でもここは上の部屋よりも人がたくさん出入りするから、にぎやかでいいですね。

I：ここはにぎやか。雨でなかったらもっとにぎやか。

（というようなことをしばらく話している、寒くなってきたしそろそろ戻りましょうか
とって6階に戻る）

<コメント>

ここでわたしはこの自分の会話記録を「うまくいかなかった」例と（とりあえず）位置づけ、そこから考えられることを反省も含めてすこし考えてみたい。

「うまくいかなかった」例をとりあげようと考えた理由は、村田氏の「傾聴」の技法、目的を意識し、それと比較して反省するなかで、何人かの人から自分のした会話を「うまくいかなかった」と感じたことがあったということで、むしろその「失敗」や「違和感」に、「傾聴」と今回私たちがとりくんでみたことの差異が見えているのではないかと考えたからである。

村田氏の「傾聴」における目的は明確であり、それは簡単に言えば、相手の話を受動的に「聴くこと」によって、精神的な「ケ

ア」を行うことである。こうした「傾聴」の理念からは「うまくいった・いかなかった」という結果、反省が導き出せられる。

自分の会話記録を振り返ってみると、「傾聴」としては「うまくいかなかった」と考えられるようにも思えるが、まったく無意味な会話であったとも思えない。「うまくいかなかった」という反省は「ただ話し相手になること」はできても、「相手の核心にせまること」はできなかった、というふうにも言い換えられるかもしれない。村田氏の傾聴でもただの「おしゃべり」ではなく、相手のスピリチュアルなニードに耳を傾けることが必要だとされている。

しかし実際初対面の人の話を多少意識的に聴くということをしてみて感じたのは、話の「核心」、あるいは村田氏がスピリチュアルなニードと呼ばれるようなことは、相手がかつともそれを持っているというのではなく、話の中でおそらく偶然にでてくるようなものなのではないか、ということである。

この点については、今回の実習の反省会でも話題になり、何人かの方の意見を聞くことができた。そのなかでは、スピリチュアルなニードがどの人にもあるのか、ということはその時のタイミングによっていたりして、偶然的なものと言えるので、普段表出できないものを引き出してあげるといふ点では、スピリチュアルなもの「表層」のものはそれほど区別しなくてもいいし、日常のコミュニケーションとそれほど差がないのではないかという意見や、施設にいること自体の違和感、孤独感、年をとっていくことの不安感、そうしたものをまぎらわすために誰かと話していたいということもあるので、傾聴されることの内容は傾聴される人が持っているいろいろなレベルを含んでいるのではないかという意見が聞かれ、参考になった。また、わたしのお話ししたIさんはもと神父さんということもあって、自分のスピリチュアルなニードには敏感なはずであるから、話がそれ以上展開しなかった、ということはIさん自身が今はそのような話は必要ない、と考えられたからではないか、という具体的な指摘も

いただいた。

ただ、「うまくいかなかった」とはいえ、Iさんはいちど話の途中で、「足を悪くして・・・」と過去のつらい経験にさかのぼるような話のとりかかりを示しているようにも思われ、そこでわたしがそれ以上のことをきけなかったというのが残念である、という指摘もいただいた。言いよどむというのは、これからつらい話になるけど聞いてくれるか、というふうに聞き手の姿勢が試されているのではないか、という看護士の方のご意見が大変印象的であった。あとで考えてみると確かに、わたしの「うまくいかなかった」というもやもやの中には、たしかにあのときもっとしっかり話の続きを聞けばよかったのではないか、という後悔も多少あるように思えた。ただそれ以上に踏み込めなかったというところに、わたしが「ケアするもの」として、すでにある枠組みの中で、そのトレーニングに行ったのではなく、臨床哲学の学生という立場で、「ケアとは何だろう」「ケアの現場とはどのような所なのだろう」あるいは「私たちにケアができるのだろうか」といった漠然とした問いや不安を携えつつ、教室のそとで初対面の方とお話しするということをはじめて試みたという、その微妙な立場の揺れがあらわれているようにも思われた。

わたしに関して言えば、この会話記録の例ではそうした立場の揺れも含めて、目的としての「ケア」や、「相手のために」話

を聴くということを強く意識しすぎたために、緊張したり、態度が硬くなったりしたということがあったように思う。「ケア」、「相手のために」という目的に強調点をおきすぎたり、それを意識しすぎたりすると、かえって方向づけられた不自然なコミュニケーションになってしまうということがあるのかもしれない。「自然に」話を聴くことができればいいのだが、こうした施設をほとんどはじめて訪問するわたしのようなものにはそれが難しかった。その場合の「自然」というのは「慣れ」のことなのだろうか？

また、うまく話ができたと思えるような場面では、「ケア」をするとか、「相手のために」という意識がどこかにいってしまっていて、「聴くこと」というよりも、その話じたいにのめり込んでいるというようなことがあった気がした。老人保健施設を幼稚園の子どもたちが訪問すると、「おじいちゃんの顔へんやなー」と、職員の方もひやっとするような言葉を子どもが言うときにも、入居者のかたは怒るところか、むしろうれしそうに見守っているということがあるそうである。もしくはそういった施設でペットとして動物が飼われたりすることがある。そのことがもし「ケア」と呼びうるならば、その場合の「ケア」とはどういうことをいっているのだろうか。「相手のために」という目的がなくても、あるいは「相手のために」という意識が消えたときにうまく「ケア」ができたと感じるような気がす

る) というのはどういうことなのだろうか？

臨床哲学の授業では、「ケアとはなにか？」という問題をめぐって議論が重ねられてきたが、今回、「実習」という形で、実際「ケアの現場」と呼ばれているところに出かけてみて、そうしたところでは、簡単に「ケア」できたとか、「ケアになる／ならない」とか言えないような様々なレベルの出来事が起こっているということ、実感できたと思う。この経験を生かして、「ケア」に関して、個々の事例にそくして細かに考えていくことができれば、と思う。

(たかはしあや 博士前期課程)



聴くことの「入り口」

堀江 剛

二回目の実習で、ある入所者との会話を記録に残した。会話記録を作ってみて考えたのは、会話そのものがケアになる時のきっかけはどのようなものか、といったものだった。人の話を聴くことがそのままケアになるとすれば、その入口に当たるものは何か。Aさんとの会話記録に基づいて、この「入口」の問題を考えてみたい。

[状況] 女性73歳Aさん(左半身麻痺、痴呆軽度)。お昼ご飯のため声を掛けに行き話となった。部屋はみんな昼食にいていたので、僕とAさんだけであった。約20分ほど話す。

H: おばあちゃんお昼、お昼ご飯ですよ。食べにいきますか。

A: ああ、・・・誰や、・・・息子やおもた。

H: (近づいて) こんにちは。(ベッドの傍らにしゃがんで) 息子さんようここにきやはんの。

A: 前はそうでもなかったんやけど、最近はよう顔あわせに来てくれます。ええ息子です。

H: ふーん、ええ息子さんなんや、よう来てくれはるんや。息子さん何してはんの。

A: 車の会社に勤めてます。あんたとは何してはんの。

H: 今はなんにもしてへんけど、親父が毎日畑作ってます。

A: 野菜作ってはんの。

H: ええ、野菜作ってます。

A: ええなあ、野菜。大根とかほうれん草とか・・・

H: うんうん、大根とかほうれん草とか、なすびとか・・・

A: なすび。ええなあ。(急に泣き顔になって) ええなあ、おばあちゃんに食べさせてやりたいわ。

H: おばあちゃん？

A: うん、うちのおばあちゃん(おそらくこの人の母親だと思われる --- 注堀江)。もうとっくに死なはったけとな、おばあちゃん野菜好きやった。野菜の料理も上手やった。おばあちゃんに野菜食べさせてやりたいわ。おいしい野菜たべさせてやりたいなあ・・・

Aさんの「息子やおもた」は、やや唐突な反応であった。Aさんは、この施設で密かに常に息子さんが訪問してくれるのを望んでいたと考えられなくもない。Aさんの「ええ息子です」という言葉は、その前の理由(最近よく施設へ来てくれるようになったこと)から自然に出てきたものであった。しかし、今から思い出してみると、あまりに自然な通りいっぺん過ぎる「ええ息子」であるという印象を与える。もしかしたら、Aさんは、息子さんがあまり来てくれなくて寂しい分、僕に通いっぺんの「ええ息子」を説明して、それで自分で「ええ息子」だと納得したかったのかも知れない。「ええ息子」という言葉は、Aさんが何か息子について語りたいうきっかけになったのではなく、むしろ息子について深く語りたくないために使った表現なのではないか。実際僕が「息子さん何してはんの」と問いかけたとき、Aさんは自分の息子について多くを語らず、逆に「あんたとは何してはんの」と問い返された。

ところで「野菜作ってはんの」も、やや唐突に、Aさんの思い込みを込めたような言葉として表出されたように感じた。このような「野菜作る」といった何気ない言葉に、その人にとって十分感情を入れ込むことができるような、いわば「スピリチュア

ル」なケアへの糸口があるのかもしれない。これは推測だが、Aさんは「野菜作る」という言葉を偶然口に出したことによって、自分の過去を「物語る」契機を見出したのではないか。これは十分ありうることである。僕は、まったく単純な繰り返しをするにとどめ、Aさんの反応を待った。Aさんからは、次々に野菜の名前が出された。また、Aさんの言葉に次いで、僕も思い出すままに野菜の名前を挙げてみた。そして、これも偶然に「なすび」という僕の言葉にAさんは深く感動したようだった。そこからAさんの過去の「物語り」(Aさんのお母さんの話)が突然のように出てきた。



会話の中で、何気なく偶然に出た言葉(この場合は「野菜作る」と「なすび」)が「物語り」を作るきっかけになっている。それはあらかじめ知ることは出来ない。おそらく会話の中で何度か、そのような物語への入口にあたる言葉

が発せられているのだろう。後で看護師の西川さんと話していて、このような「傾聴」(高々30分～一時間程度)は職員には絶対できないもので、それ自体大切なケアである、ということになった。そういうところがボランティアの意味なのか、とも思った。それは「傾聴」というコミュニケーション行為がそうであるように、決して計画的になされるのではなく、偶然起こるようなも

のをたっぷり含んでいるからだと考えられる。

おそらく、「傾聴」によって人がケアされるかどうかは、こうした偶然的な要素が大きいものであり、またそれだからこそ、通常の積極的になされるケアとは別の意味でのケアがそこで成り立つと言えるのだろう。Aさんがこれまで生活してきた中で親

しんだ言葉を、ゆっくり「聴く」ことを通じてAさん自身に投げ返す作業そのものが、ケアになるのである。それはある意味で、やろうとして出来る一方的なケアではない。そうではなくて、受け身に徹して「待つ」ことであり、ケアされる人が自分の生活の中で発した言葉を聞き逃さないための時間を設けることなのである。

(ほりえつよし 博士後期課程)

特集：ケアの現場に触れる

待機するゆとり

会澤久仁子

授業で村田さんから傾聴について伺ったとき、村田さんは、ただ話を聞くことが相手への援助になり、まず相手の話を上手に聞けることが援助の基本であると述べられた。私は、村田さんのやり方で上手に人の話を聞いて援助できるなら、やってみたいと思った。そこで、集中して傾聴を試みその感触を得て、また反省するよい機会になると思い、老人保険施設ガラシアでのボランティアに参加した。

私は初めてガラシアを訪ね、5階のフロアでボランティアをした。5階には主に軽い痴呆の方が入所されている。時によるそうだが、その日は入所者の方々は落ち着いた。そのためか私は特別な違和感を感じることなく入所者の方々の中に入ることができた。ただ、食堂で車いすに座ったま

ま眠っている方がかなりいて、私はそれを見ていると、その方々には何かすることがないのかと思ったりした。誰でも何かすることがあれば嬉しかったり楽しかったりするだろう。しかしそれぞれの方がどんなことをできるのかどうか、したいのかわか、初めての私にはわからなかった。じっとしている方は、したいことができない環境だから、それをするのを諦めているのかもしれない。だから本人や周りの人は自由度の高い環境になるよう努力することが重要だ。しかしその一方で、本人にとっては限られた環境を受け入れることもまた毎日を暮していくための課題であろう。より多くの自由を求めることと、それがとても叶わず苦難を耐えたり、不自由や死を受け入れなければならないことの、その両方をよ

く見極めたいと思った。

傾聴については、私は9人の方々とお話しができた。そして2人の方からは長くお話しをうかがった。少ししかお話しをうかがえなかった場合もあるし、明らかにうまくいかなかった場合もある。しかしどの経験からも、傾聴について学び、考えることができた。

第一に私は、目の合う方とは何らかの会話や交流ができるものだと感じた。目の合う方のところへ行ってお話を伺っていると、別の方がこちらを見ていて、次にその方のところへ行くとそこでもお話できた。ただし、ある傾聴の途中しきりにこちらを見ていた方で、話しかければ一言二言受け答えできるが十分に話せない方がいて、私はその方とどう接したらよいか想像がつかず、その方の所に行けなかった。いま考えると、私はその方の所に行ってみて、二、三言葉をかけてみるとか、しばらく座ってみるとかするだけでも喜んでもらえたように思う。それは傾聴ではないが、十分コミュニケーションになるし、ケアになるだろう。また私は、車いすに座って寝ている方やずっとテレビを見ている方のことも気になって、声を掛けてみたのだが、やはりそのような方とはあまり会話にならなかった。だから、まず話したがっている方の話を聞けばよいと思った。

第二に、痴呆の方は何度も同じ話を繰り返すが、それでもとにかく話をしたい様子だった。私は恐怖や怒りの感情をぶつける相手として求められた場合もあれば、辛い

体験を聞いてくれる相手として求められた場合もあった。またある方は自分の人生と人生訓を語ってくださった。そして何度も同じ話を繰り返し聞いているうちに、相手が別のことを思いだして話が広がることもあった。

第三に、傾聴をやってみる前は、こちらからいろいろ質問するのではなくて相手の話を受け止めて返すという傾聴のスキルに不自然な感じを抱いたが、やってみるとそうではなかった。傾聴のスキルは話し手の考えるスピードや順番に合わせて聞くためのもので、話し手に合わせないと話を聞くことはできない。聞手が質問や意見を加えるのを控えて、話し手の漠然とした言葉をそのまま受け止めて返す方が、話し手はもっと説明して聞手にわかってもらいたいという気になるようだ。スキルは、聞手が話し手を理解したいとか援助したいという気持から、相手を話しやすくし、話したい気にさせるために役に立つ。そしてよく話を聞いたうえで、聞手が理解したことをまとめて話し手に確認すると、話の内容と二人がそれを理解し、されていることを確認できて、話は進む。また今回はできなかったが、聞手は話の欠けている点を指摘し補う質問をすることや、意見することが必要な場合もあるだろうか。さらに、あくまで理解や援助の目的のために傾聴のスキルを使わなければならないと感じた。理解したり援助する気がないにもかかわらず傾聴するふりをすると、相手に誤解を与えたり、相手を欺くことにもなりうるからだ。

第四に、相手の方の名前をうかがい、名前を呼ぶことの重要性がわかった。相手の方は、名前をうかがったり名前を呼びかけると、ハッと反応される。名前を尋ね、名前を呼ぶことは、特定のあなたの話を聞きたいというこちらの気持ちを伝えることになる。私は、話をした方の名前をせっかく伺っても、別の方と話し始めるとその前に話した方の名前を忘れてしまったので、もっとしっかり覚えなければならなかったと反省している。さらに傾聴にかけた時間も記憶しておく、どの程度傾聴できたかの一つの目安になるだろう。

今回のガラシアでの傾聴は、数人の方にそれぞれ一回のわずかなものであった。私

たちがガラシアに行って入所者の方々に話を聞くことは、入所者の方々にとって不可欠な援助ではない。しかし、私が入所者の方々に交じって一日を過して感じたのは、老人や病人の世話をしたり、子どもを育てたり、人に様々なサービスをするような場所では、思いがけず相手方に何かあった場合にいつでも対応できよう待機しているゆとりが必要だということだ。そのような場所では、忙しすぎてもいけないし、効率が良すぎてもいけない。だから、私たちのようなボランティアが入所者に交じってたずんだり、話を聞いたりしているのも、入所者にとってちょっとしたゆとりを提供することになるのではないか。

(あいざわくにこ 博士前期課程)

特集：ケアの現場に触れる

老人保健施設の入所者とお話とおして 感じたこと・疑問におもったこと 西村高宏

いくつかの困難な問題を引きずったまま、敢えてケアの現場へと飛び込んでみることにした。自分がはたして何ものとしてその現場へと赴いていくのか、あるいは、自分がいったい何を目的としてそこへと関わっていくのか、そういったことへの疑念・問題点への解答を依然として宙吊りにしたままである。

われわれは、はたして何ものとして現場

へと関わっていくべきなのか。毎週金曜日に行われる臨床哲学の演習では、幾度となくそれに対する議論が展開されてきた。われわれは、はたして何ものとして現場へと関わっていくべきなのであろうか、言ってみればこの問いは、そもそも臨床哲学というものを一方で意識しつつ、われわれは、はたしてどのようなかたちをおして現場へと関わっていくべきなの

か、として言い換えることができよう。それは、臨床哲学の 実習 というかたちをとおしてか、あるいは純粹にボランティアとしてなのか。つまりは、そういった自分が何ものとして現場へと赴いていくかという、その自らの立場上の問題への解答を敢えて保留にしたままで、このたびは、老人保険施設ニューライフ・ガラシアへの訪問を志願することにしたのである。そしてその際、このように自らの立場・動機を敢えて曖昧にしておいたことが、逆に、今回の訪問において、より明確なかたちで、ぼくに対して数々の問題点を垣間見させてくれたようにも感じられた。それはまさに、さまざまな入所者との実際の会話・やり取りのなかで徐々に浮き上がってきたものばかりである。

ちなみに他方で、今回の訪問においては、緩やかなものではあれ幾分明確な関心事があったことも言い添えておかなければならない。それは、かねてからわれわれ医療研究グループのなかで問題にされてきた「傾聴ボランティア」という実践活動の援助的意義に関してである。より厳密に言えばそれは、ケアの現場における「聴く」ということのもつ援助的意味合いに関してのものと言える。一方でそのようなことへと関心をはらいつつ、たくさんの入所者とお話をさせていただくことができた。それとともにたくさんの 疑問点 も浮き上がってきた。今回のこの報告では、そういった老人保健施設の入所者の方々とのお話をとおして、このぼく自身が感じとった



疑問点などを書き連ねてみることにしたい。

数々の入所者とのやり取りのなかで、とくに印象に残ったものがある。

女性Bさん(85歳くらい)。車椅子にすわってホールにおられた。このときは、あらかじめ介護福祉士さんによって設定された状況(介護福祉士さんは、Bさんにむかって、なにかお話を聴いてもらったらといって去っていかれた)のなかに、その介護福祉士さんにかわって後から自分が会話をはじめるにはいるといった少しばかり不自然な状況のなかで会話をはじめることができなかった。そのせいもあってか、この御老人とのあいだには、最初から 聴くものと聴かれるもの といったある種 硬直した関係 のようなものが成立してしまったような印象があった。相手は、ぼくが話を切り出すのを最初からただじっと待っておられた。そして、その様子を感じ取ったぼくは、最初からいきなりたくさんの質問を投げかけてしまう。相手が、このやり取りをなにかの 調査 のように勘違いされておられるのがすぐに分かった。

そして、しばらくのあいだ、ぼくの投げ

かけた質問に対してBさんが端的に答えるといった 単調なリズム のもとで会話が つづいた。Bさん自身が、最初から今回のこのやり取りを、なにか このぼくの質問に答える場 として受け取られていたのか、Bさんがこの 単調なリズム を越えて、あらたに御自分のお話を始められるといった状況へと事態が好転することは最後までなかった。そして、このぼく自身も、そのような状況へと事態を促していくことができなかった。Bさんは、最後の最後までただ緊張しておられた。

会話が最後のあたりまで進んできた際に、最終的にぼくが感じていたことは、むしろBさんのこの 緊張 を取り除くために、一旦この出来てしまった 単調なリズム そのものを終えるということ、つまりなんとかしてこの会話そのものを止めるということであった。上手く行かない会話は、止める ということも許されるべきではないだろうか。とはいえ、それは本当に 止める べきなのだろうか。もしそうであったと仮定した場合、果たしてそれをいつ 止める ことが最も望ましいのだろうか。会話を終わらせるときのそのタイミング、それも問題とされてこなければならぬようにも思われる。

しかしながら、そもそもなぜこの会話はうまくいかなかったのだろうか。Bさんとのこのやり取りは、会話のリズムが単調になりすぎてうまくいかなかった。これは、傾聴 としてはすぐさま うまくいかなかった事例 ということにされてしまうの

であろうか。とはいうものの、そもそもこの 傾聴がうまくいかなかった/うまくいった などという言い方は、はたして 傾聴 がどのような状況を通じて展開していった際に適用されるべきものなのであるうか。

相手の コア・メッセージ を正確に読み取り、それを自分の言葉に置き換えてから、また相手にそれを送り返す、傾聴 がうまくいくということは、ほんとうにそういうことなのであるうか。あらためて考えてみる必要があるように思える。またそれ以前に、なぜ自分で、このやり取りが決定的にうまくいかなかったとを感じるのか。その根拠はいったいどこにあるのか。様々な問題点が次から次ぎへと湧き出てくる。

うえの問題点を考えてみる際に、あらかじめつぎのふたつの問題点について考えてみる必要があるように思える。

そもそも日常に生活するレベルにおいて、うまくいったコミュニケーション とは果たしてどのようなものことなのであるうか、ということである。ただ単にそれは、自分の言いたいことが相手に正確に伝わったといったような単純なことがらではないようにもおもえる。またそのまえに、そもそも 傾聴 というコミュニケーションと、日常の生活レベルで展開されるコミュニケーションとの違いはどこにあるのか。当然のことながらそのことも問題とされてこなければならぬはずであろう。

さらに、Bさんとのこのやり取りのなか

で、自分自身が感じたこととして正直に言っておかなければならないことは、もともと今回のこの 会話（傾聴）のうちに、ある種の硬直さといったようなものが備わってしまったことのその一番の要因が、実際には、会話を始める際の状況設定云々のはなしではなくて、それは、ぼくがBさんをはじめて見たときに抱いた印象、「ちょっと苦手だなあ～」といったこの 感じ にこそ潜んでいたのではないかということである。もしかすると、ぼくの抱いたこの感情が、ぼく自身の何気ない 仕種 をとおして表に現れ、不本意なかたちで相手に伝わってしまい、今回のこの会話（傾聴）の不全を招いていたのかもしれない。そのように考えることもできる。と同時に、このような体験から次のような問いも浮かんでくる。

先に上げたこのような状況のうちにあって、傾聴（会話）の関係（傾聴するもの 傾聴されるもの）は、そもそも 医者 患者 のあいだにおけるそれのように、極めてクリアなかたちでの 役割 関係へと回収することができないもののように感じられる。そもそもこの 傾聴 の関係は、 役割 の関係としては 希薄な関係 なのではないだろうか。したがって、たとえ 傾聴 が「スキル」によって裏打ちされているべきものであるとはいえ、こうして 傾聴（ボランティア）をとおして御老人のお話をうかがい、また語りかけるのは、まさに普段のわれわれのように、日常生活のなかにおいて 自然的な構え（役割意識

をあまり持っていないという意味で、また、それに対して強い専門職性を要請されることがないという意味で）で生活する普通の人間なわけであるから、やはりそこには相手との向き不向きの問題や相性の問題などといった、つまり、 役割 の関係によってはすくい上げることのできないような 人間関係の問題 が横たわってきてもおかしくないのではないだろうか。

医者という 役割 に対するわれわれの意識は、当の医者自身にとっても、あるいは患者にとっても極めて強固でクリアなものであるから、 医者-患者 関係のあいだには、お互いの人間性といったようなものが極力あらわれにくい（もちろん例外もあるだろう）。それにたいして、傾聴は、その 役割意識 自体がきわめて 希薄 なわけであるから、そのぶんこの関係のうちには互いの 人間性 といったようなものがあらわれやすい。人間同志のあいだにおける 相性 や 向き不向き など、それをほんとうに 理論 や スキル などによって解消することができるのであろうか。またその必要性はあるのであろうか。

とはいえ、ぼくが思うに、もともと 傾



聴ボランティアの特異性(いいところ)は、医者 患者 関係のように極めてクリアなかたちで 役割 関係へと回収されてしまうような、いわゆる 形式的な人間関係を越え出たところにこそ求められるべきもののように思える。そしてまた、その 傾聴ボランティア という試みの出発点も、同じ生活空間のなかに住まう人間同志の かかわり合い のうちにこそあらかじめ設定されるべきものなのではないだろうか。しかしながら他方で、極めて逆説的な言い方ではあるが、傾聴ボランティアにおける「専門職性」なるものも当然問題にされてこなければならぬようにも思える。それでは、そもそもボランティアとは異なり、対人援助職におけるその「専門職性」は、一般にみて、果たしてどこに求められているのであろうか。村田久行氏の説明によれば、もともと「対人援助の専門職は、さまざまな援助についての『ものの見方、考え方』を識別し、身につけ、そして目の前の患者・クライアントの苦しみの援助に最も有効な方法を選択し、構成しなければならない、そして、そこにこそ対人援助職の専門職性が存在している」とされている。そしてさらに村田氏は、このような対人援助職の専門職性は、そのまま援助のコミュニケーションスキルについても適応されるべきであるとしている。したがって、ボランティアといえども、極めて基礎的なスキルのひとつとされている「傾聴」に対しても、当然なんらかの専門職性が要求されてこざるを得ないと言えるのである。

以上のような経験をとおして、最終的に次のような問いを立ててみるができる。

傾聴ボランティア では、その 役割意識が 希薄 であるだけに、より 自然なかたち で御老人と接触できるように思える(もっとも、そのことによる弊害もある)。そこに、ある種 プロフェッショナルではない ということの積極的意義を見出すこともできよう。またそれが 自然であると言えるのは、その行為が、極めて専門的な修養を通じて培われてきた具体的な 技術 によって、自らの行為を完全に武装してはいないからであるとも言い得る。しかしながら他方で、傾聴ボランティア という行為そのものが、極めて具体的な 援助 を目的とした「クライアントと援助者との専門的対人関係」(村田)として成立することも事実である。したがって、それが専門的な関係であるがゆえに、そこで援助者は、そのために必要な専門的なスキルをより遅くしていくという手続きを要請されてこざるを得ない。とはいうものの、スキルを遅くしていくということは、それがそのまま強い 役割 意識を生じさせることを招き、相手との 自然な関係を、ふたたび 不自然な 関係へと立ち返らせてしまうといった懸念もうまれてくるのではないだろうか。最終的にわれわれは、そもそもボランティアというものが備えもつ存在意義そのものの問題へと直面していかざるを得ないのではないだろうか。(にしむらたかひろ 博士後期課程)

現場と実習

——看護と哲学、二つの領域の「実習」をめぐる——

仁平雅子

一連の「ボランティア実習」に参加してきて、今考えていることをまとめてみたい。なお、その際、筆者が看護大学の教員でもあり医療研究グループのメンバーであること、また、今回の二回のボランティア実習のうち一回目にのみ参加したことの二点を明記しておくことにする。

看護学実習に関連するさまざまな仕事のうち、実習要項の作成というのがある。これは、その実習の目的や目標、そのために実習場でできることを構成立ててまとめようとするもので、各実習ごとに指導にあたる教員群で作成することが多い。これは、表向きには、学生が実習現場で目的を見失わないためのものであり、また、自分の行為や経験を看護という視点から意味づけしていくときの助けとしての、学生の学習目標として扱われる。

一方そこには同時に、それを作成した教員集団の、看護や現場や実習ということについての理解や認識、ひいては臨床能力までもが端的に現れていて、そういう読み方をするのもとても興味深い。実際、私のよ

うな駆け出しの教員にとっては、他のメンバーとの共同作業で実習要項の作成プロセスに携わること自体が、非常に有益な実習準備となる。これをしながら、実際の臨床現場で教員としてどのように実習場を組織立てることができそうかについて見通しを持っていく。臨床というのは本来、学生のためにあるのではないから、そこを学習の場としても活用させてもらおうというにはそれなりにしなければならないことがあり、その中には当然、スタッフとの関係作りとか、いろんな意味で学生が安全にその場にいられるようにすることとか、看護学生としての責任とか、物事の優先順位、といったことまで含まれる。

つまりこれらが、教員側からいえば実習環境を整えるというような言い方に含意されたことであり、実習要項をもとに学生との間で予め申し合わせることでできることである。

しかし、事前にどれだけ準備したとしても、実習場での実習指導は結局またそれを乗り越えてしまうようなことになる。とい

うのも、学生ひとりひとりの実習の経験が、実習要項、つまり学習目標の範囲でおさまりのつくものではないからだ。

例を挙げよう。自宅に癌で闘病中の母親を持つ学生が、同じような癌を持つ女性の患者さんを受け持つことになったとして、その経験がとおり一遍のもでなくなるのは想像できるだろうか。あるいは、若い学生たちにとって同年代の女性の妊娠出産をめぐる看護が、何か深く揺さぶられるような経験になることは想像できるだろうか。実習で、要項に書かれたことがくたなく見えるほどリッチな経験をするには決して少なくはないのだ。

(テレビの感動ドキュメンタリーで見るような?)「リッチな経験をする」とは、実習目標にはそぐわない。それをねらって出かけるとおかしな実習になるからだ。少なくともケアに関連する実習ではそういえると思う。なぜなら、そういった実習目標の背後に控えるステロタイプなイメージに自分の経験がすいとられて、結局相手も自分も見えずに終わることになるからだ。本当の「リッチな経験」は、相手とそれに看護を通して関わろうとする自分についての、さらには看護というものについてのそういったステロタイプなイメージを捨てたところから生まれてくる。

そして、実習目標にはあげられないにもかかわらず、だからこそ、どの学生も一度でもいいからそういう経験に「出会ってくれたら」と看護の教員なら思わない人はいないだろう。看護における実習とは、こん

なあてずっぽうな思い入れをも含めたものである。実習は単に何かの方法や技術の応用・適用というだけではない、という私の主張はこのあたりを根拠としている。

これまで述べたように、実習要項なるものがまがりなりにも存在する看護の領域であっても、学生の経験はそれを凌駕している。このことは別の言い方をすると、「今この人にとって」なにが看護援助になるか、ということは過去のどんな本にも結局載っていないのだ、ということだ。世界中でまだ誰も出会ったことのないケースに今出会っているのだという自覚に立てば、これまで積み上げられてきたことに敬意は払い大いに助けも借りるけど、最後のところでは範に頼ることができない。

私見だが、医療研究グループの堀江氏が、臨床哲学の授業(毎金曜日)での報告の際、自分たちの行ってきた試みに「実習」という言葉を付すかどうかという議論の中で「(実習に参加する姿勢として)無目的であろうとした」と言ったことは、現場の要請してくるそのような側面を表現しようとしたものではないか。ケア・傾聴など、手がかりになりそうなものの助けをとりあえず借りつつ、現場という場での範を持たないあり方へと一気に達しようとするチャレンジだったのではないか。

このことの意味は決して小さくはない。このアプローチは、先に述べた看護の世界で実習要項に表現できないままになっている側面をダイレクトに捕まえようと試みる

ものであり、ある面で、現行の専門職教育にシリアスな反省を促すものと見るができるからだ。私たちは、この領域で核心的と思われるこのたぐいの事柄について、少なくともまだ実習要項の中にうまく表現できているとは言えない。看護の領域における「実習」という独特のよびならわしかたは、単なる「応用」以外の側面を同時に指し示していた。これらのことが今までどういうわけか漠然としか意識されてこなかったことは、今回認識を新たにしたことの一つである。

さて、「無目的な実習」というこのアプローチは、看護側から見て以上のような面で有意義だったのだが、私たちの中心的な課題である「現場で哲学になにが可能か」ということについてはどうだろうか。第二回目のいわゆる「傾聴実習」が済んだ後になって、日本赤十字看護大学から池川清子氏が来阪したおりに、また、金曜6時限の臨床哲学の授業に参加している看護関係の出席者らから、口をそろえたように「何のための実習だったのか」という質問が出たのは私には大変印象深かった。この時私は、二度の施設訪問に至った経過を質問者に何とか説明することに終始したが、今から考えると、同時に、どうしてそういう質問がされるのかについて、問われた側に十分理解できるように質問者からもっと詳しく話をきくことが大変重要だったと思われる。なぜなら、私自身がまさに同じ質問を自分たちの試みに対してもってきたからで

あり、私が敢えて「無目的」に現場に行ってみるということを受け入れてきたとすればこの質問について幾ばくかのことがわかればと思っただことだったと思うからだ。

さらにいえば、自分自身の質問を他者から投げかけられたあの瞬間は、それこそテーマであった聴き聴かれることということの典型が現実化した貴重なチャンスではなかったか、ということも考える。そして結局、実際行ってみてどうだったのか。現場での哲学の意味を探るのだから、これは現場側から教えてもらうしかないだろう。尋ねてみるべきだった。惜しいことをした。もちろん、誰に？どのように？尋ねればいいのか、ということは思案のいるところだ。しかし、その方法さえ考えてゆけば、本当に意図は全部捨ててもいいのかもしれないと思う。

(にへいまさこ 博士前期課程)



生きているはだか

——LOVE'S BODY 展にて私たちが見たもの——

大北全俊 栗田隆子 高橋綾

6/17日(木)サントリーミュージアムで行われていたLOVE'S BODY展に行った。LOVE'S BODY展は、メッセージが明確でわかりやすい写真展であった。

そのメッセージとは、ヌード写真がその「表現も評価も、男性の目で決定されてきた歴史」を見直し、その歴史において繰り返し表現されてきた「男性が理想とする女性の身体、若く均整のとれた健康的な」身体とはことなる身体をヌード写真を通して示す、ということであった。そうした明確なメッセージのもとで、男性主導のまなざしにおいては「他者」とされてきた女性の視点、ないしゲイそしてレズビアン視点からとられたヌード写真が盛り込まれていた。たとえばロバート・メイプルソープが恋人のパティスミスを撮影した写真や、ゲイのカップルがお互いを撮影した写真などが、そのメッセージに沿って展示されていた。しかし、LOVE'S BODY展全体のまとまりのよさが、展覧会全体を一個の「作品」として、生活とは少し距離のあるように感じた。被写体として西洋人が多いこと、白黒の写真が多いこと、特定の宗教的背景に訴えること、どれも私たちには見慣れない光景のような気がした。強烈な写真なのだけどもあくまで完成され

た作品であって、日常の生々しさがあまり感じられなかった。だから、それらの写真が街中にポスターで張られていても、あくまで「作品」であって抵抗はない。しかし、そのなかで、TOKYO GIRLSだけは私たちの日常に近く、生々しい。だから、もし街中にその写真を張ったなら、その生々しさのためにきっとドキッとするとするだろう。でも、その写真は抵抗感や不安を感じさせるものというよりも、むしろどこか安心させてくれるものを感じた。

TOKYO GIRLS(神蔵美子撮影)と題された一連の写真は、平均して二十代くらいの、風俗で働く女性たちをモデルにしたヌード写真である。写真展の中でも、ひときわ大きなフレームに明るいカラーの写真で、モデルは思い思いに楽なポーズをとっている。写真に添えられたプロフィールによると、写真家は女性で、風俗で働く女の子一人一人に興味を持ち、その子たちのポートレートを撮ろうと考え、取材をしながら撮影をしたらしい。「その時そこには、男性の視線を意識したセクシーポーズや、営業的な媚や笑いをすべて脱いだ女の子がいた。」

TOKYO GIRLSは展覧会の趣旨に添った写真ではあるのだが、その趣旨には納まりきら

ない。この「納まらなさ」とはなにか。この写真展のメッセージは「男性主導のヌードではないヌード」、言い換えれば「ポルノではないヌード」を提示することであった。しかし、TOKYO GIRLSのヌードはポルノVS非ポルノという枠組みを越えている、あるいはそんなことを気にもとめずにあっけらかんとしている。

週刊誌のグラビアのように、いわゆるヌードというのは顔とヌードになった体が地続きになっている。服を着ている人が服を「脱いだ」というよりは、頭からヌードを「着ている」。それにひきかえ、TOKYO GIRLSの裸は、まるで銭湯から抜け出てきたような、「普通」の裸だった。それがかえって「ドキッ」とさせられる。普段、服を着ている見慣れた人が服を脱いだような、銭湯で裸になっている人がいきなり街なかに出ているような印象だった。背景も陰影もないその写真には、ただその裸がそこにあるという明るさがいっぱい広がっていた。

生活の中で他人の裸を見ること、特に生活の中で女性の裸を見ることは意外とないように思う。ただ銭湯に足を運ぶだけでもすぐに分かることだが、いろんな体がある。太ったからだ、やせたからだ、年老いたからだ、若々しいからだ、まさに人それぞれである。しかし、これだけ女性のヌードが氾濫しているのに、あるいは氾濫しているからこそ、同性である女性の目から、その様々な女の人の裸は遠ざ

けられる。そして、つい「着ぐるみのヌード」と比べながら、自分の体について語ってしまう。TOKYO GIRLSを見たとき感じた安心感は、ただいろんな体があるということからくるのかもしれない。「着ぐるみのヌード」に体を語る基準を独占されるのに対して、TOKYO GIRLSでは、いろんな体と比べることを「遊んでいる」うちに、自分の体を取り戻してい

「着ぐるみのヌード」と「普通のはだか」

る。「いろんな体があるよね」「この人の体ぶよぶよしている」「へそピアスかわいいよね、私もしようかな」「意外とこの人人気あるんじゃない」など、気軽に人の体について語るうちに、女の人はい自分の体についても気軽に語れる、あるいは語らなくてすむ「あっけらかんとした」感覚を取り戻す。

ところで、男の人もこの写真に安心感を感じるだろうか。もし安心感を感じるとしてもそれは女の人と同じものか、もし感じないとしたら、むしろ不快感を感じると

したらそれはなぜなのか。ただここでは、そこにある裸は、男性のまなざしを許さないという裸でもないが、男性のまなざしがなくてもよい「気軽な」裸だということは言えそうだ。

じつは、女の人だけでなく、男の人もそうした「気軽な」裸への感覚からは遠ざけられているのではないか。既存のポルノから排除されているのは、「他者」のまなざしではなく、こうした「はだか」にたいする「あっけらかんとした」感覚なのかもしれない。食事をし、仕事をし、おしゃべりをし、そしてセックスもす

るという私たちの「普通のはだか」がそこからは抜け落ちている。その点で、TOKYO GIRLSのはだかの女の子たちの何もない背景には、キッチンでも、お風呂でも、恋人の待つベッドでもなんでもあてはまる。セックスしていてもよいけど、セックスしていないというのもありなのである。生活しているはだか、

という気楽さ。それはLOVE 'SBODY展が提示したメッセージを超えるものだったのではないだろうか？

(おおきたたけとしくりたりゅうこたかはしあや
博士前期・後期課程)

crème の誕生

栗山愛以

研究室のドアの上、極彩色を放つわがcrèmeのポスターにお気づきだろうか。crèmeには、いわゆる「クリーム」のほかに、「えりぬき、精髓」そして「いかれた」という意味がある。これこそまさに、哲学でファッションをやろうとしている一見いかれたわれわれにふさわしい。

小林昌廣は『臨床する芸術学』のなかで、ファッションとは、それを身にまとう人間にとってみれば「実用芸術」であり、徹底して「見る」側に立つ人間にとってみれば「純粋芸術」であると言っている。また、医学に身を置いているというその立場から、すべての患者が自らの身体に対する「専門家」であると考えが、「実用芸術」と言われるように、みずからのファッションに対しても、われわれは

「専門家」なのではあるまいか。そして、「純粋芸術」としてそれに距離をおくこともできる。一方思考するというのも、誰もがやっていることであり、誰もが「専門家」であると言える。このことをなおざりにしがちな哲学の現状をいましめるべく「臨床哲学」をたちあげたとするならば、同じような構図をわりあい明らかなかたちでもつファッションは、この場で論ずるに値するのではないだろうか。

このようにファッションの「実用芸術」的要素と「純粋芸術」的要素をくみつくすためには、バルトが現実の衣服の方だけに向いていると言う社会学、イメージを認識させようとすると言う記号学ではことたりない。こうしてわれわれは、その中間的切り口を濃くしつこく模索しながら、臨床哲学の精髓となるべく、日々邁進しているというわけなのである。

(くりやまいとい 博士前期課程)

臨床哲学のメチエ 99年夏の号を発行する。前号まで主に教育問題について特集を組んできたが、今回は、医療研究グループのポランティア実習の報告を掲載した。

昨年度に引き続き、今年も金曜6限の授業では学生を含む多彩な顔ぶれの集まるなか、「ケアとは何か」についての活発な議論が続けられている。今回の医療研究グループの活動の位置づけについても、とりわけ、「理論と応用」という枠組みから脱することを試みる臨床哲学にとって「実習」がどのような意味を持つのかについて、熱い議論が交わされた。その内容すべてを紹介することができないが、看護教育に携わりつつ臨床哲学に籍を置く仁平

あり、議論することから思考すること、哲学を学ぶほかない。

また昨年度から「不登校」をテーマに臨床哲学研究会を組織してきた教育研究グループは、不登校の問題を入り口としてさらに多様な視角から「教育」という問題を考え始めている。最近では高等学校などでの哲学・倫理学の教育の現場に足を運び、それについての議論するほか、さらには「学ぶということ」について哲学的に掘り下げる試みを行っている。

《臨床哲学研究会》は今後しばらく定期的開催するのをやめ、個人の研究をグループ内で十分に討論した上で、その研究に係る講師を招き、より充実した研究会を目指すこ

臨床哲学的余白

さんの文章が、そうした議論の一端を見せてくれている。授業では、臨床哲学にとっての「実習」の意味や「方法論」について未だ議論が継続中であり、ケア・医療問題のみならず、教育、セクシュアリティなどの各方面においても、同様の議論が繰り返されている。

臨床哲学研究室は大学という教育機関にある。そして、臨床哲学において誰が何をどのように教育するのかという問題について、内外から様々な関心や疑問が寄せられている。しかしながら「臨床哲学」という名前の新奇さを除けば、哲学の教育がどうあるべきかは、それ自体、哲学の内在的問題ではないだろうか。模範とするテキストを持たない臨床哲学にとって、今のところ議論の場こそが教育の現場で

とになった。次回の研究会については決定次第お知らせする。

7月末、中岡教授を含む臨床哲学のメンバー5人が、イギリス、オクスフォードにて開催された、「哲学カウンセリング(コンサルタント)の国際会議」に出席した。会議では、「哲学カウンセリング」「ソクラテスの対話」「子どものための哲学」など、哲学を社会に活かす様々な試みについての報告や議論が行われた。その多くは臨床哲学の「方法論」にも直結するものであり、次号のメチエでは、単なる情報の輸入にはならない積極的な議論を提出したいと思う。(編集者)

臨床哲学のメチエ Vol.3 1999 夏の号

編集：堀江剛 + 本間直樹

協力：高橋綾、森芳周、PowerMacG3

大阪大学文学部 臨床哲学・倫理学研究室

560-0043 大阪府豊中市待兼山 1-5

homma@let.osaka-u.ac.jp

<http://bun70.osaka-u.ac.jp/>